

## 〈海外短信〉

# 中国・貴州大学における国外長期研修の帰国報告

吉本 諭\*

中華人民共和国（以下、「中国」とする）の貴州省にある貴州大学における6か月間（2024年4月4日から9月30日まで）の国外長期研修を終えて帰国した。本稿では、国外長期研修期間に活動した内容等について報告する。

## 1. 貴州省の概要

貴州省は、中国の西南地域に位置し、周囲は重慶市、四川省、雲南省、湖南省、広西チワン族自治区と接し、東南アジアとも比較的近い位置にある。2023年時点で、貴州省の人口は3,865万人であり、そのうち漢族が多くを占めるが、少数民族（ミャオ族、プイ族、トゥチャ族、トン族、イ族など）も約1,405万人と36%を占めており、中国の中でも少数民族の割合が高い。実際、住んでいて少数民族の衣装を着た人々や少数民族のイベントなどを見ることができた。

面積は176,200km<sup>2</sup>と日本の半分弱の面積があり、平均標高は約1,000mと高く、山間地・傾斜地が多い。カルスト地形にも特徴があり、2007年に中国南方カルストとして世界自然遺産に登録されている。亜熱帯高原気候であり、年間平均気温は16.9度、年間を通して気温が安定しており、「冬場に厳冬なし、夏場に猛暑なし」と言われ、中国の避暑地として夏場には観光客が多い。2024年4月4日に初めて貴州省の省都・貴陽市にある貴陽空港に降り立ったが、筆者が20年間住んでいた日本の北海道のような爽やかな感覚を持つと同時に、その後も北海

道に似ている気候であると何度も感じた。4月から6月までは毎日のように雨が降ったこと、夏場は暑くなったもののクーラーは使用することなく、貴州大学の研究室等では扇風機で対処できた。

筆者が貴州省で行った名所や特産品などについて紹介しておきたい。先に少数民族が多いという話をしたが、まずミャオ族の集落・西江千戸苗寨（せいこうせんこみやおざい）を紹介したい。この村は、川に臨む小高い山に位置しており、遠くから眺めると、木造高床式の吊脚楼の大集落が山一面に見渡せ、千軒にも及ぶ古い家並みは山の斜面に幾重にも重なり、肩を寄せ合うように連なっている所であり、行った際に異文化を感じた。次に、青岩古鎮（せいがんこちん）は、貴州省の四大古鎮の一つであり、600年もの歴史があるプイ族、ミャオ族の街で明代（1378年）に作られ、かつては明・清代の軍事要塞であった所であり、行った際に当時を感じる雰囲気があった。

黄果樹瀑布（こうかじゅばくふ）は、アジア最大の滝と言われ、幅101m、高さ77m、滝の裏側に道があり、その裏側を歩いた際には滝の水の迫力を感じることができた。貴州省は、大

\*長崎県立大学地域創造学部公共政策学科 教授

きな橋も有名であり、交通機能に加え、観光スポットにもなっている橋もある。省都・貴陽市（2023年時点の人口は640万人）の中心部にある甲秀楼（こうしゅうろう）は、明代から続く建物で、科挙の試験において優秀な成績を修めよという意味で甲秀楼と名付けられたと言われている。夜になるライトアップされ、多くの人でにぎわっていた。また、中国の思想家で陽明学の創始者である王陽明（おうようめい）は、貴州省で陽明学を完成しており、貴陽市には陽明寺もあり、筆者も行った。

茅台酒（まおたいしゅ）は、貴州省を代表する特産品であり、高粱を主な原料とする蒸留酒（白酒）で、国酒と称される高級酒である。食べものについては、唐辛子文化であり、唐辛子を利用した火鍋は辛さに特徴がある。食べものは、基本的に油や味も濃い目である。

貴州省は、従来、中国の中でも貧困人口が多い地域のひとつと言われてきた。しかし、近年は高速道路、高鉄（日本の新幹線にあたる）、地下鉄、空港など交通インフラの整備が進められ、また省都・貴陽市内には高層ビルがいくつも建設されており、自動車の量も多い。この10年で大きく変わったとの話を聞いたが、実際、大きく発展していることを目で見えて感じるができた。

主な産業は、農業、鉱業、観光業であるが、2014年に貴陽と安顺にまたがる貴安新区が国家級新区に指定され、テンセントやファーウェイなどのサーバー基地が建設され、2015年以降は毎年、国際ビッグデータ産業博覧会を開催するなど、今ではビッグデータが貴州省の代名詞となるまでに成長している。

なお、日本から貴州に行く場合は、筆者の場合は、福岡空港・上海空港（浦東）・貴陽空港の経路で行った。

## 2. 貴州大学の概要

貴州大学のホームページ（2024年9月時点のデータ）に基づき、貴州大学の概要について述べる。貴州大学は、貴州省で最も大きい大学であり、清王朝時代の1735年に設立された貴山書院を淵源とし、大学としては1902年に設立された。120年以上の建設と発展を経て、国家211工程重点大学、国家双一流建設大学となっており、「中国の特色、世界基準、貴州のニーズ」を踏まえ、中国国内で一流かつ国際的に有名な大学への発展を目指し、教育・研究・地域貢献などにスピード感を持った実践的な取組みが進められている。

キャンパスは、西キャンパス、東キャンパス、南キャンパスと3つある。キャンパスの正門や様々な所で使用されている「貴州大学」の特徴ある文字は、中国建国の父と言われる毛沢東氏が自ら書いたものである。また、歴史的な建物として東キャンパスにある大礼堂と勉学堂があげられる。大礼堂は講演会場・集会場として、勉学堂は研究会などに活用されていた。ちなみに、現在の中国共産党総書記である習近平氏も1981年に貴州大学を訪れており、勉学堂での読書会に参加している。

貴州大学には、現在40の学部があり、学部生は3万5千人以上、大学院生は1万7千人以上と、学部生と大学院生を合わせて5万2千人以上の学生が在籍しており、また2,800人以上の常勤教師を含む4,200人以上の職員がいる。図書館も3つのキャンパスにあり、蔵書数は、393万冊以上の書籍と374万冊以上の電子書籍が所蔵され、合わせ767万冊以上となっている。筆者も入館した西キャンパスの図書館は、大きさ・風格ともに圧巻であり、中国らしさを感じることができた。またキャンパスごとに、陸上競技場、

体育館もあり、食堂も複数ある。

授業は、朝8時開始、昼休みが12時から14時30分まであり、その後20時50分頃まで行われていた。1つの授業は100分（50分+10分休憩+50分）であり、授業と授業の間は20分である。学生は原則、寮生活であり、学部生は6人部屋、大学院生は4人部屋とのことであった。また、キャンパスが広いため、校内バスが運行されていた（運賃は一律1元）。学生の様子として、大学での授業が終わるとバスケットボールを楽しんでいる様子が印象的であった。

余談であるが、筆者が貴州大学にいた折、6月上旬に大学入学試験・高孝（ガオカオ）が実施されていた。新聞のネットニュースで中国全土の高考の志願者数が1,342万人との記事を見た際、日本の大学入学共通テストの志願者数49万人と比較して、その多さに驚くとともに、大学受験の大変さを感じた。また、中国での大学院・碩士課程（日本の修士課程）の志願者数は438万人（2024年）であり、受験倍率も大学にもよると思うが6～7倍との話を聞き、学部から大学院へ進学することも難しい現状を知ることができた。

### 3. 貴州大学外国語学院日本語学科の概要

筆者は、貴州大学では外国語学院日本語学科に所属し、研究室も与えていただき研修活動を行った。ちなみに、外国語学院では、英語、日本語、ロシア語、フランス語、ドイツ語、韓国語、スペイン語、ミャンマー語、タイ語など9つの言語の外国語教育が行われている。

日本語学科は1979年に設立され、中国の西南地域では歴史が長い学科であり、2024年で45年となる。日本語学科には、学部生は毎年約60名、碩士課程の大学院生（日本の修士課程にあた

り、修学期間は3年である）は毎年約30名が入学している。その他、非日本語専攻の学習者も毎年約200名がおり、教員数は、中国人教師15名、日本人教師1名である。貴州大学には日本語の書籍も20万冊以上あり、日本との大学等との交流については、広島大学、山口大学、千葉大学、武蔵野大学などと大学間協定を結び、留学生の派遣をはじめ長年友好交流を続けている。

2018年には、日本の国際交流基金（日本の外務省が所管する独立行政法人）と協力して「貴陽ふれあいの場」（外国語学院223教室）が設置されており、教室には、日本の書籍、マンガ（少年ジャンプなど）、アニメ（鉄腕アトム、ドラゴンボール、鬼滅の刃など）の原画も展示されており、貴州にいて日本に触れることができる場となっていた。また、日中文化交流や各種交流の場としての役割に加えて、日本語学科の学生の活動・自習の場として、教員の会議・研究会の場として有効活用されていた。ちなみに、ある日本語学科の学生は、幼いころから日本のアニメ・マンガ・ゲームに興味をもち日本語が次第に理解できるようになり、日本語を専攻するに至ったという話をしてくれ、これらのコンテンツが持つ国際的な影響力を知ることができた。

また、外国語学院の中には貴州大学日本研究所もあり、こちらには多くの日本の書籍が配架されていた。日本の元総理・羽田孜氏も貴州大学を訪れており、看板の「貴州大学 日本研究所」という文字は羽田孜氏が書いた文字であった。

学生もよく勉強しており、日本への留学を目指す学生、そのために日本語検定1級試験を受験する学生、日本語スピーチコンテストで好成績を目指す学生など、学生が努力している姿を多く目にする事ができた。

## 4. 貴州大学での筆者の活動報告

### (1) 授業の実施

貴州大学の先生から依頼を受け、貴州大学外国語学院日本語学科の大学院碩士課程（日本の修士課程）1年生（26名）を中心に、日本に関する授業（特別講座）を日本語で4回実施した。

1回目の授業は、4月24日に「統計データでみる日本・長崎県の人口動向と経済」（於外国語学院223教室）、2回目の授業は、5月15日に「事例をとおして考える日本と中国の観光」（於外国語学院223教室）、3回目の授業は、6月7日に「日本の食・食文化についての事例紹介と一考察」（於博学楼222教室）、最終4回目の授業は、8月27日に「日本の大学生の就職と大学院進学状況についての紹介」（於外国語学院223教室）の内容で実施した。大学院生の授業は1回120分で行った。

毎回、出席者に授業の感想文を書いてもらったが日本語が上手なことに驚くとともに、聞く・読む・話す・書くの4技能の基礎ができていたと感じた。1回目の授業では講義の後、「日本の都市と地方の状況と中国の都市と地方の状況を比較して、同じところ異なるところは」という題目でグループ・ディスカッションをしてもらった。活発な議論に加え、最後にグループで話し合ったことを各グループの代表者に発表してもらったが、話の内容や話し方が日本の学生とあまり変わらない上手さであった。

### (2) 先生方の授業見学

貴州大学での授業の方法を学ぶため、9名の先生方に授業見学の依頼をし、それぞれ学部2年生もしくは3年生の授業を1回ずつ見学させてもらった（4月8日、4月23日、5月22日、5月29日、6月3日、6月12日、6月14日2つ、9月2日）。

講義形式の授業に8回、日本概況に関するプレゼンテーションの授業に1回出席させてもらった。朝8時から始まる授業もあったが、遅刻をする学生がいなかった。講義形式の授業では、第2言語の修得に関する授業、日本の小説、日本語の文法、卒業論文の書き方に関する授業などに参加した。

多くの授業はパワーポイントを使用して進められ、タブレットでノートやメモをとる学生を多く見かけた。また、テキストはあったが、見学した授業では配布資料はなく、事前にWeChat等で共有もしくは授業時にパワーポイントを写真撮影していた。

とりわけ、卒業論文の書き方に関する授業は、日本の大学ではあまり聞いたことがなく、参加した日は、学生が1人ずつノートパソコンを教室に持参し、参考文献の書き方、脚注のつけ方についての授業が行われていた。また、日本概況に関するプレゼンテーションの授業では、日本の伝統文化などについて1人ずつパワーポイントを使って日本語で発表が行われていた。日本語を良く練習していることが伝わる報告であった。参加した多くの授業の最後に、担当の先生からの勧めで、筆者から授業の感想について話をさせてもらった。

### (3) 碩士論文報告会への参加

5月23日と24日の2日間行われた日本語学科の碩士論文報告会に参加した。先述したとおり、碩士とは日本の修士にあたる（修学期間は3年間）。2日間とも8時30分から17時まで2つの会場（外国語学院の202会議室と216会議室）に分かれて28名の審査が行われた（1会場・1日あたり6～8名の審査、報告+質疑応答に1人・40分前後）。学生はパワーポイントを使っの20分前後の報告の後、教員との質疑応答であっ

た。

2つの会場でそれぞれ、貴州大学の教員3名と他大学の教員2名（貴州民族大学・重慶交通大学の教員、貴州黔南科技学院・貴州财经大学の教員）の合わせて5名の教員が審査を担当されていた。加えて、会場ごとに質疑応答などの書記をする教員1名も同席されていた。報告の際は、パワーポイントの資料だけではなく、碩士論文自体も審査教員に渡され審査が行われていた。教員の質疑が活発であり、学生も一生懸命に質問に応答していたことが印象的であった。

#### （4）日本への留学・インターンシップ報告会への参加

4月19日に外国語学院226教室で開催された、日本への留学・インターンシップ報告会に参加した。留学先の報告は、貴州大学と交流関係がある山口大学と武蔵野大学に留学した学生の報告、インターンシップについては福井県の勝山スキー場で行った学生の報告等であった。インターンシップについては1人約3カ月間行っており、スキー場でのスタッフとしてアルバイトも兼ねて働き実践的なインターンをしていた。留学やインターンシップの合間にも日本の様々な場所に行ってきたことも報告があり、中国の学生の活発さと行動力を感じた。また、一人一人が感じたこと・思ったことを自由な雰囲気でも報告していたことが印象的で、大変さの中にも楽しかったことが伝わってくる報告会であった。

#### （5）日本語スピーチコンテスト等の審査員を担当

8月30日に、日本語を第1外国語としていない学生の日本語スピーチコンテスト（テーマは

「異文化を感じる瞬間」）、9月21日には日本語を第1外国語としている学生の日本語スピーチコンテスト（テーマは「中国の龍」）の審査員を担当した。学生1人当たり3～5分程度のスピーチがあり、筆者を含め5名ほどの先生方それぞれが採点項目ごとに点数をつけ、点数の高い順に、特賞、1等賞、2等賞、3等賞が決まっていた。

また、コンテストの運営は、司会を含めてすべて学生が行っていた。皆、コンテストに向けて練習を積んで臨んでおり、各自の練習の成果を披露していた。貴州大学内でのコンテストで上位になった学生は、さらに練習を積んで西南地域の大会や全国大会などに進む仕組みとなっており、選ばれた学生はそれらの大会でも受賞していた。このような経験が学生の自信につながり、さらに日本語を習得し上達することへの意欲につながっている。

余談であるが、5月22日には、日本語の寸劇コンテストの審査員も担当した。学生数名が1つのグループになり演劇をするもので、舌きり雀などがコミカルに演じられていた。これらは学生が日本の文化等を学んだことを表現・披露する場となっていた。

#### （6）研究会・学科会議への参加

日本語学科の先生より案内を受け、研究会や学科会議にも参加させてもらった。5月19日には、貴州省で日本語を教えている大学・学院の先生方が、貴州大学外国語学院に集まり、日本語に関する書籍出版に向けた編纂交流促進会が行われた。筆者も参加させてもらい、執筆を担当する先生等の研究報告を見学することができた。

また、7月10日・11日・12日の3日間、貴州大学で行われた日本語翻訳等に関する研究会にも



参加させてもらった。中国外文局の先生、天津外国語大学の先生などが報告されたが、初日の中国外文局の先生による報告後の質疑応答の際には、筆者から、「中国と日本の文化の違いについて長年日本を研究して来られた先生の立場からどのように思われますか」と質問し、「中国人は大きく物事を捉えること、日本人は繊細に物事を捉え、侘び寂びをはじめ独特の感性を持っていること」等の回答をいただいた。

日本語学科の学科会議にも、5月13日と6月5日の2回参加させてもらった。5月13日は筆者が初めて学科会議に参加したので、筆者の自己紹介の後、日本語学科の先生方が自己紹介してくださり、その後、教務関係の会議が行われた。6月5日は日本語学科の教育研究活動報告会で、先生方が活動報告をされる様子を見ることができた。

#### (7) 交流会・大学行事への参加

貴州大学の中日文化交流会に3回参加させてもらった。1回目は4月14日に貴州大学の近くにある花溪公園での花見交流会が行われ、桜の時期は過ぎていたが、春の陽気とバラや緑が美しい公園で、貴州大学の学生や先生たちと会話や歌を楽しんだ。2回目は4月27日に、外国語学院で行われた中日茶文化交流会に参加した。日本の山口大学に留学されていた貴州大学の先生が日本の茶道を長年習われてきており、講師となって筆者や学生たちに日本茶の作法について日本文化体験室（和室）で教えていただいた。その後、貴陽ふれあいの場（外国語学院223教室）に場所を移し、中国茶の入れ方の作法を中国人のお茶の先生から教えていただいた。3回目は5月19日に、外国語学院・貴陽ふれあいの場（外国語学院223教室）で行われた日本料理交流会に参加した。おにぎり、みそ汁、カレーライス、

たこ焼きを学生たちと一緒に作り食したが、とても美味しくできた。なお、花見交流会と中日茶文化交流会の様子は、貴州大学外国語学院のホームページに掲載された。

また9月上旬には、日本の国際交流基金の職員の方2名と日本の大学生7名が日本語学科に交流に来られた。筆者も誘いを受け、9月6日の貴陽ふれあいの場での交流会と9月7日の西キャンパスの体育館で行われたスポーツ交流会に参加した。

大学行事にも参加した。6月30日に卒業式が東キャンパスの運動場で開かれ、小雨模様であったが卒業する晴れやかな学生たちの笑顔が見られた。また、9月4日には入学する学部生・大学院生合わせて1万4千名の入学式が西キャンパスの運動場で行われ、学生たちの凛々しい様子を見ることができた。

ちなみに、貴州大学の2024-2025年の学年暦を見ると、2学期制（セメスター制）であり、新年度となる第1学期（秋冬学期）は2024年8月26日から2025年1月10日まで、40日あまりの冬休みを挟み、第2学期（春夏学期）は2月24日から7月11日まで、その後、40日あまりの夏休みとなっていた。

## 5. 各種の活動

(1) 佐賀県青少年友好交流団の貴州訪問に同行

貴州省と1999年より長年交流活動が続けてきている日本の佐賀県の青少年友好交流団55名（佐賀県職員5名・高校生20名・大学生30名）が、8月16日から8月22日までの6泊7日の行程で貴州省に来訪され、交流活動が行われた。貴州大学の大学院生・学部生など数名もサポートとして交流団に同行するのに合わせ、筆者も初

日（貴陽空港での出迎え）から最終日（貴陽空港での見送り）まで同行させてもらった。

8月17日には、貴州省人民対外友好協会・貴州省青年連合会主催による貴州大学での交流会の開会式とその後の中日学生の交流活動をはじめ、青岩古鎮、西江千戸苗寨、中国天眼（FAST・世界最大の電波望遠鏡）、壩陵河大橋（大橋が多い貴州省の中でも有名な大橋の一つ）、黄果樹瀑布、国家大数据（貴州）総合試験区展示中心（国家ビッグデータ展示センター）などを見学することができ、貴重な体験となった。

（2）貴陽国際ビッグデータ産業博覧会の見学  
先述したが、貴州省は中国初のデータセンターモデル基地として国の認定を受け、2015年から毎年、貴陽国際ビッグデータ産業博覧会が開催されており、中国のビッグデータ産業をリードする位置づけにある。2024年8月29日に、10回目となる国際ビッグデータ産業博覧会に見学に行った。テンセントやファーウェイ等をはじめ沢山の企業が展示ブースを出しており、AIを活用した先端技術をはじめ様々な技術製品を見ることができた。多くの技術製品を見て、中国の場合、企業だけではなく、人々の生活にもスマート技術が普及していることを感じることもできた。

（3）貴州省国際友好都市交流協会議への参加  
貴州大学より案内を受け、9月9日に、貴州省国際友好都市交流協会議に、貴州大学に来ている海外からの留学生とともに参加した。貴州省人民政府の要人をはじめ、貴州省と友好関係にある、リベリア、ラオス、タイ、スリランカ、モンゴル、ベラルーシ、韓国、日本など15か国・32都市の地方政府の要人・関係者が出席した大規模な会議であった。日本からは貴州省と長

年交流を続けている佐賀県と群馬県からの交流団が参加されていた。会場の大きさ・7か国語の同時通訳など、このような国際会議には初めて参加したため良い経験となった。

## 6. 貴州での日本食の現状

筆者は、農業経済を専門としているため、日本の食の販売状況についても見学した。貴陽市内のスーパーマーケット・コンビニに行くと、日本企業の食品・飲料を見ることができた。日本の食品・飲料メーカーは、基本的に中国で現地法人を作り中国で加工・販売している。ただし、輸入商品を扱っている値段が高めのスーパーマーケットに行った際には、日本から直接輸入している商品も多く見ることができた。

日本食の飲食店にもいくつか行ってみた。日本料理のお店では、さしみも出されたが、日本とほとんど変わらない鮮度・味を確認することができた。回転寿司のお店もあり行ってみたところ、こちらでも日本とほぼ同じメニューで鮮度・味ともに日本とほとんど変わらなかった。中国内陸部でも食材の確保や、鮮度を保持したままの流通ができていることも知ることができた。米・肉類・野菜・果物についても、豊富な種類と量、値段が安いと感じた。そして、中国では、日本食だけではなく、世界の国々の食（生鮮品・加工品・外食）を食べることができるまでになっていることも知ることができた。

余談であるが、日本語学科の学生の中には日本に留学・旅行に行き、日本食を良く知っていた学生もいたこと、多くの学生がハイブリッド米の父・袁隆平（えんりゅうへい）氏を知っていたこと、そして中国ではスマート農業が展開され農村振興に寄与していること、を記しておく。

## 7. 貴州で生活をしていて感じたこと

貴州(貴陽市)で生活をしていて、道路、空港、高鉄(新幹線)、地下鉄、高層ビルなどの建物等のインフラが整ってきており、さらに建設・整備が進められている様子を知ることができた。技術製品についても、自動車の普及とりわけ電気自動車の普及やドローンなど、日本円にしても高額と思われる商品を多く見ることができた。とくに中国製のAI機能が搭載された電気自動車の機能の充実度はこれまで日本では見たことのないようなものであった。中国におけるAI・電気自動車などの先端技術(スマート技術)の普及の速さを感じた。

そして何より、スマートフォンで人が動く社会であった。スマートフォンは、電話・メールとしての機能は一部にすぎず、生活する上での社会基盤となっている。個人・組織間の連絡・やり取りはWechatで行われ、情報伝達スピードが速い(中国国内での連絡・やり取りではEメールは一切使用しなかった)。お金の支払い・やり取りもスマートフォンであり、今ではコンビニなどでも指紋認証・顔認証で決済が可能のところまで来ている。子供からお年寄りまで情報リテラシーが高く、貴州で外出する際は、スマートフォンと家のカギさえ持っていれば外出できた。将来的に、あるいはすでにになっている地域もあるのかもしれないが、中国では何も持たずに外出できる社会も近いのではないかと感じた。そして何より人材の厚み・その多さが印象に残った。

余談であるが、中国で生活をしていて、夜になると人が多くなり昼間よりも賑やかだったこと、生活に必要な食費・光熱費・交通費・通信費(電話代・Wi-Fi代)は日本よりかなり安いと感じた。

## 8. おわりに

中国・貴州大学での6か月間(2024年4月4日から9月30日まで)の国外長期研修での活動・体験・経験をととして、筆者自身、教育・研究をはじめ多くの知見を得ることができた。そして、この経験を今後の教育・研究などに活かしていければと思っている。

研修期間も終わりを迎えようとしていた9月下旬、貴州大学外国語学院日本語学科の先生方、大学院生、学部生それぞれから、筆者のために送別会を開いていただいた。先生方の送別会では、外国語学院の副院長である王晓梅(おうしょうばい)先生をはじめ日本語学科の先生方より、貴州省の省都・貴陽市の名所である甲秀楼を形どったミャオ族の刺繍の置物をプレゼントしていただいた。中国から帰国後、この置物は長崎県立大学佐世保校にある筆者の研究室に飾っている。貴州でお世話になったすべての方々に感謝しつつ、そして再び貴州に行く機会があることを願い筆をおきたいと思う。

### 謝辞

貴州大学外国語学院の副院長である王晓梅先生には、受け入れにあたり多くのご尽力をいただくとともに、研修期間中も多くのご配慮をいただきましたことに御礼申し上げます。日本語学科の学科長である文瑩(ぶんえい)先生には入国前の様々な手続きに加え、研修期間中、大学での活動および生活上の不便がないようご尽力をいただきましたことに感謝申し上げます。また、日本語学科の各先生方にご配慮いただきましたこと、日本語学科の大学院生・学部生の皆さんに多くのサポートと気配りをいただいたことに感謝いたします。

国外長期研修への出発にあたっては、長崎県



立大学の浅田和伸学長、地域創造学部の綱辰幸学部長、地域創造学部公共政策学科の黒木誉之学科長をはじめ、長崎県立大学佐世保校の先生方そして公共政策学科の先生方に、応援と学内業務においてご配慮をいただきましたことに御礼申し上げます。

貴州大学の皆様、長崎県立大学の皆様、ありがとうございました。

### 参考資料

貴州大学、<https://www.gzu.edu.cn/>（2024年11月15日閲覧）。

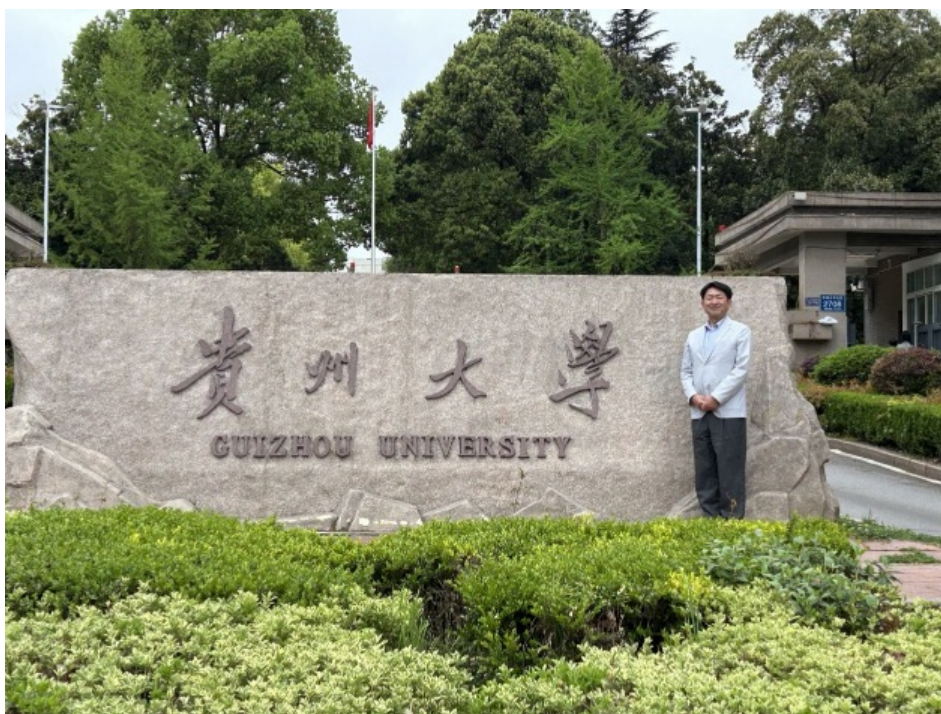
貴州大学外国語学院（花見交流会）、<https://fl.gzu.edu.cn/2024/0419/c12430a215954/page.htm>（2024年10月15日閲覧）。

貴州大学外国語学院（中日茶文化交流会）、<https://fl.gzu.edu.cn/2024/0506/c12430a217161/page.htm>（2024年10月15日閲覧）

貴州省日本観光センター、<http://kishu-kanko.com/>（2024年11月15日閲覧）。

長崎県立大学（吉本諭・国外長期研修帰国報告）、[https://sun.ac.jp/pages/30188/detail=1/b\\_id=35946/r\\_id=2711/](https://sun.ac.jp/pages/30188/detail=1/b_id=35946/r_id=2711/)（2024年11月15日）

在重慶日本国総領事館、[https://www.chongqing.cn.emb-japan.go.jp/itprtop\\_ja/index.html](https://www.chongqing.cn.emb-japan.go.jp/itprtop_ja/index.html)（2024年11月15日閲覧）



貴州大学・東キャンパスの正門にて (2024 年 4 月 5 日)



貴州大学・西キャンパスの正門にて (2024 年 4 月 5 日)



貴州大学での授業実施時の様子 (2024 年 4 月 24 日)



貴州大学での研究室にて (2024 年 9 月 25 日)





貴州大学外国語学院日本語学科の先生方と一緒に (2024 年 7 月 4 日)



送別会の際、王曉梅・貴州大学外国語学院副院長より記念品をいただいた (2024 年 9 月 26 日)